

格差をめぐる社会意識の変化 昭和期から平成期にかけての静かな変容

大阪大学／統計数理研究所 (客員)

吉川 徹 (きっかわ とおる)

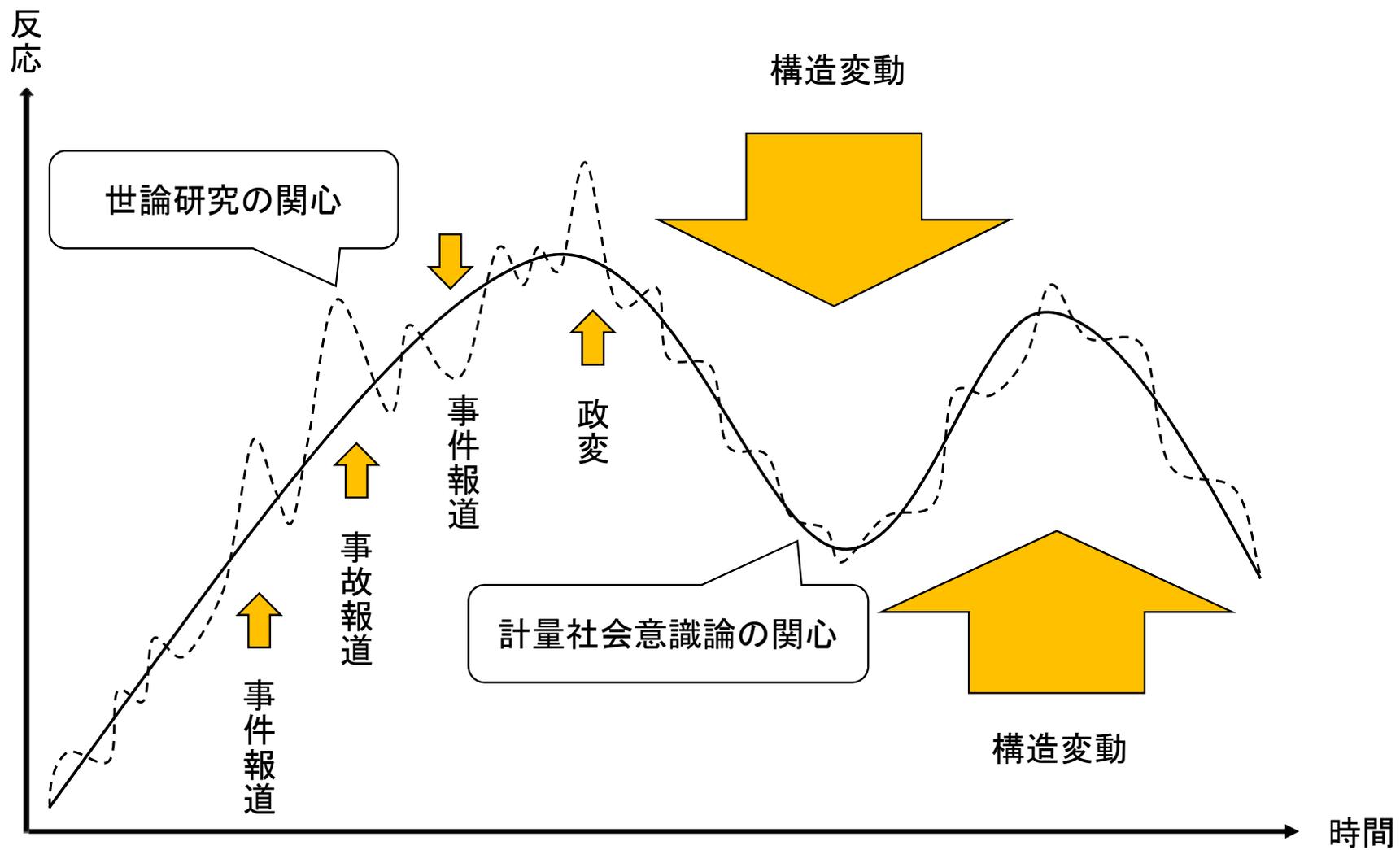
2015.11.05 統計数理研究所 公開講演会

SSPプロジェクト(2010～)

- 総格差社会を読み解く調査科学
- 社会変動の「ソフトウェア」である社会意識論から、時代のトレンドをもう一度語りたい
- 郵送法、個別訪問面接法、ウェブ法によるSSP調査シリーズを実施・解析
- 集大成調査設計： 第1回SSP調査(2015年)
- 提示理論： 『現代日本の「社会の心」』吉川徹(2014年)

変わる？変わらない？

- 社会意識論
 - 大きな時代の潮流を捉える
- 世論統計
 - 繊細な推移を報告
- 同じ漁場で違う魚を狙って「操業」
- 国民性調査と「日本人の意識」調査は別格

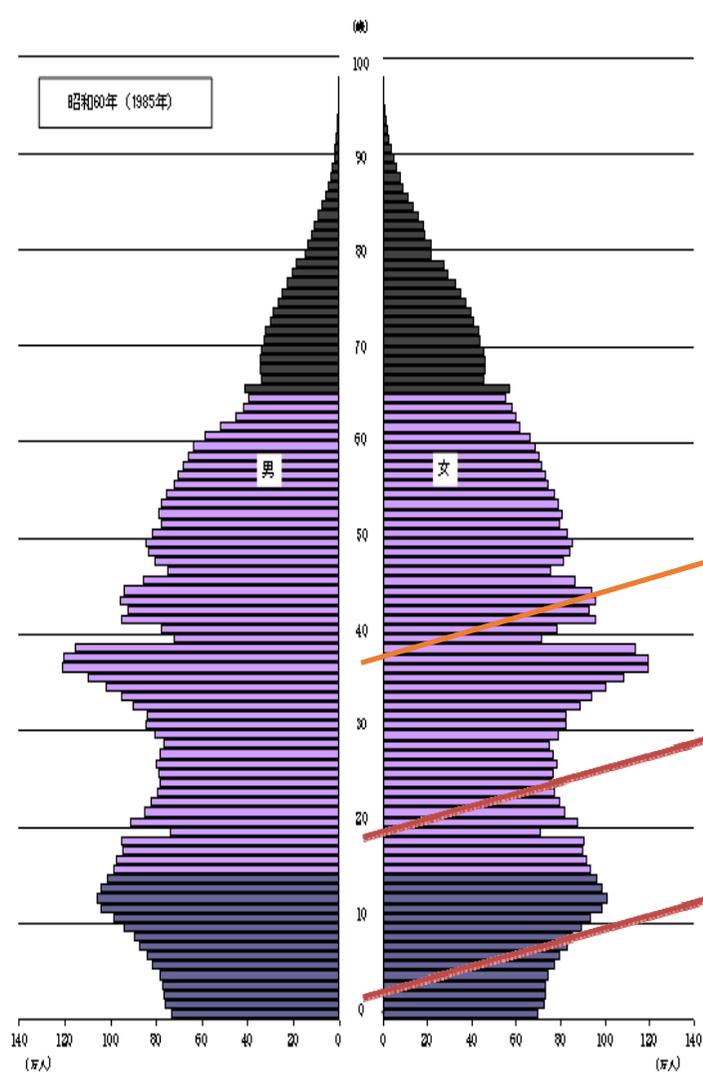


世論研究と計量社会意識論の関心の相違

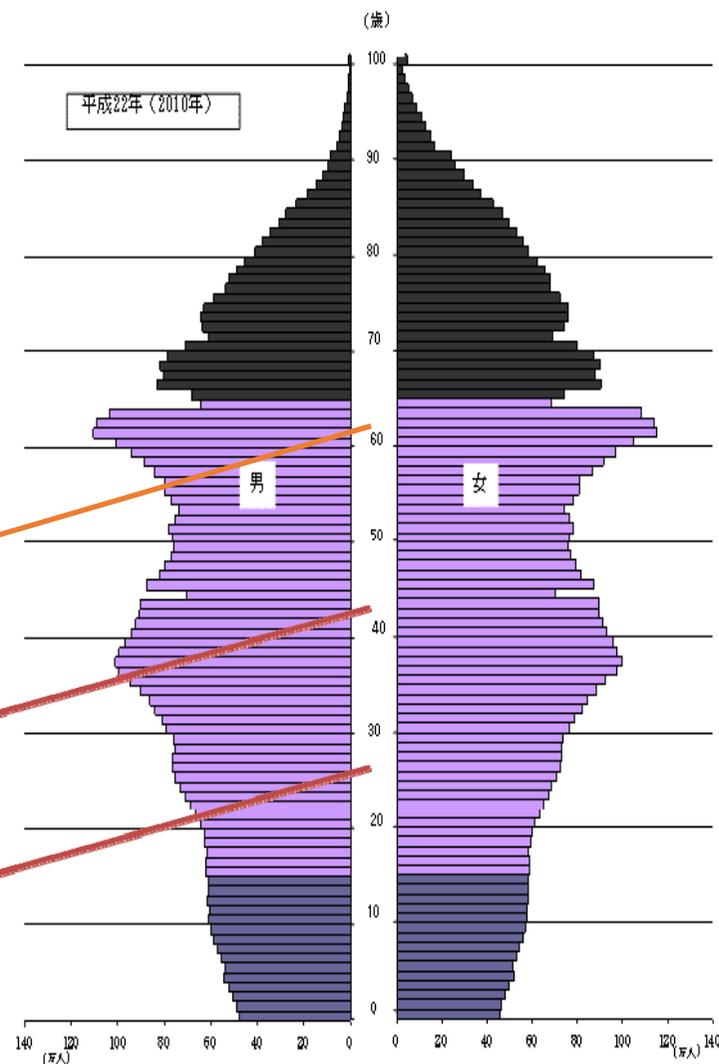
変わる？変わらない？

- 80年代後半から現在まで
 - 四半世紀≡親子1世代のめぐり(次図)
 - 昭和から平成へ
 - 20世紀から21世紀へ
 - 「第一の近代」から「第二の近代」へ(今田 1987, Giddens 1991, Bauman2001, Beck 2002)

世代の入れ替わりと人生の局面変化



1985年の日本社会



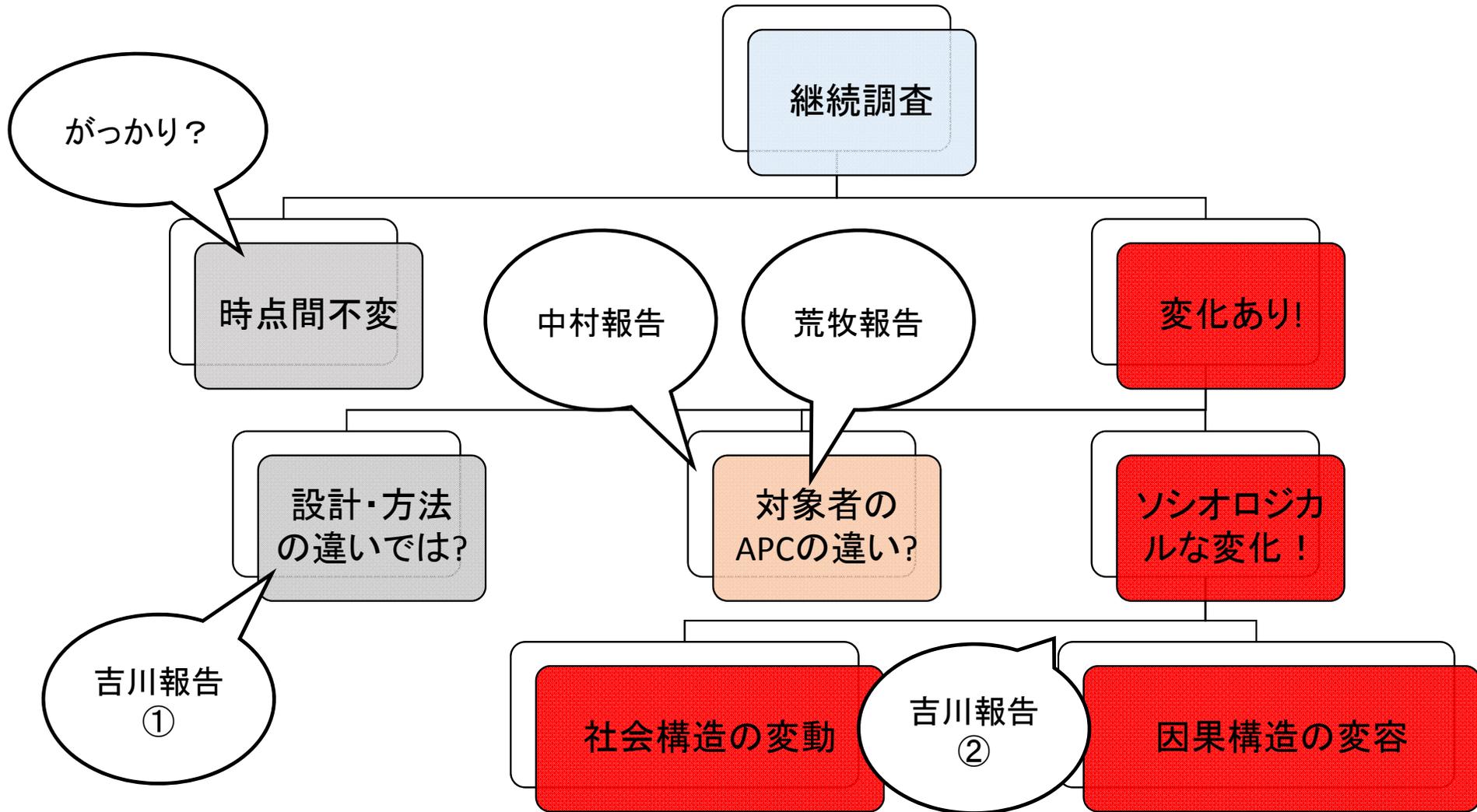
2010年の日本社会

中村報告
との関係

時代変化のキーワード

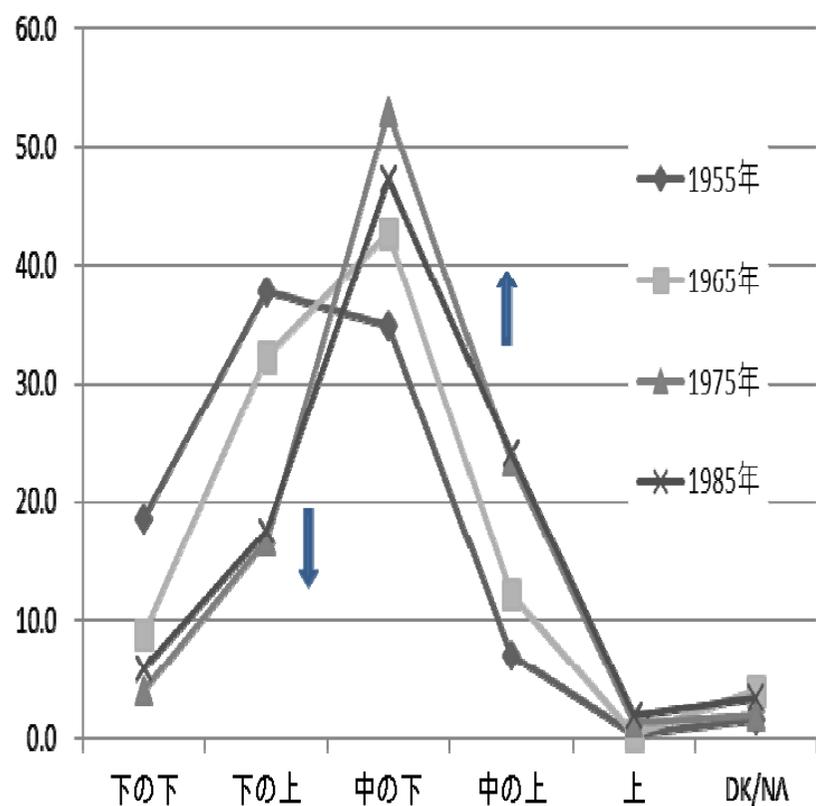
- 「第一の近代」→「第二の近代」
 - 固体(solid)社会から流体(liquid)社会へ
 - かつての枠組みを起点とする見方しかありえない
- ① 上下の軸(総中流→格差→貧困)
- ② 新旧の軸(伝統—近代の考え方の筋道)

変わる？変わらない？

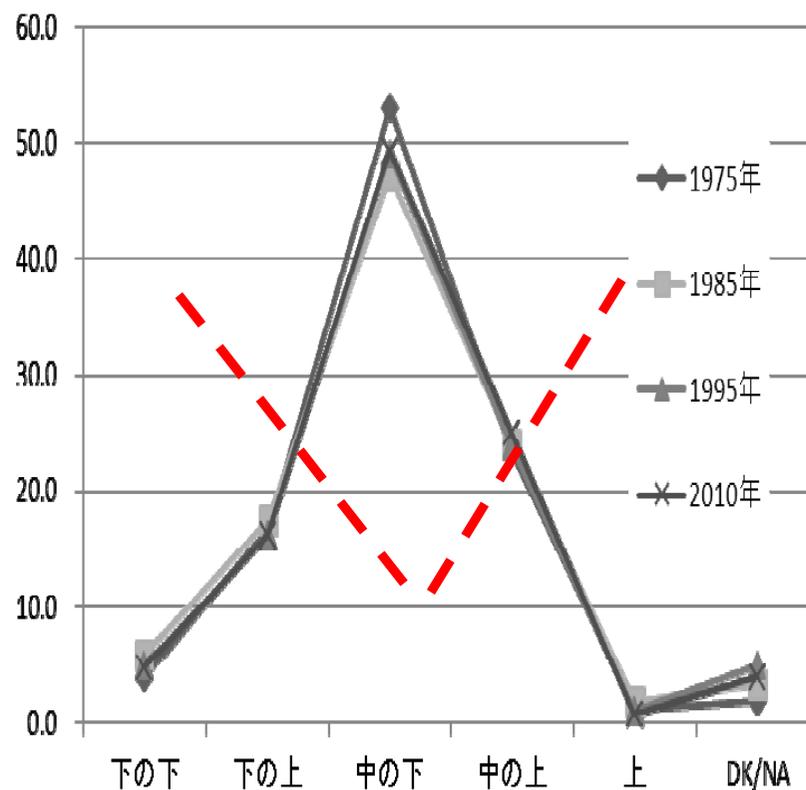


「同じ質問」が「困った」変化をした事例

高度経済成長期の総中流化



その後の高原期



55年・65年型 提示カード

イ、上 (上流階層)

ロ、中の上 (中流階層の上のほう)

ハ、中の下 (中流階層の下のほう)

ニ、下の上 (下流階層の上のほう)

ホ、下の下 (下流階層の下のほう)

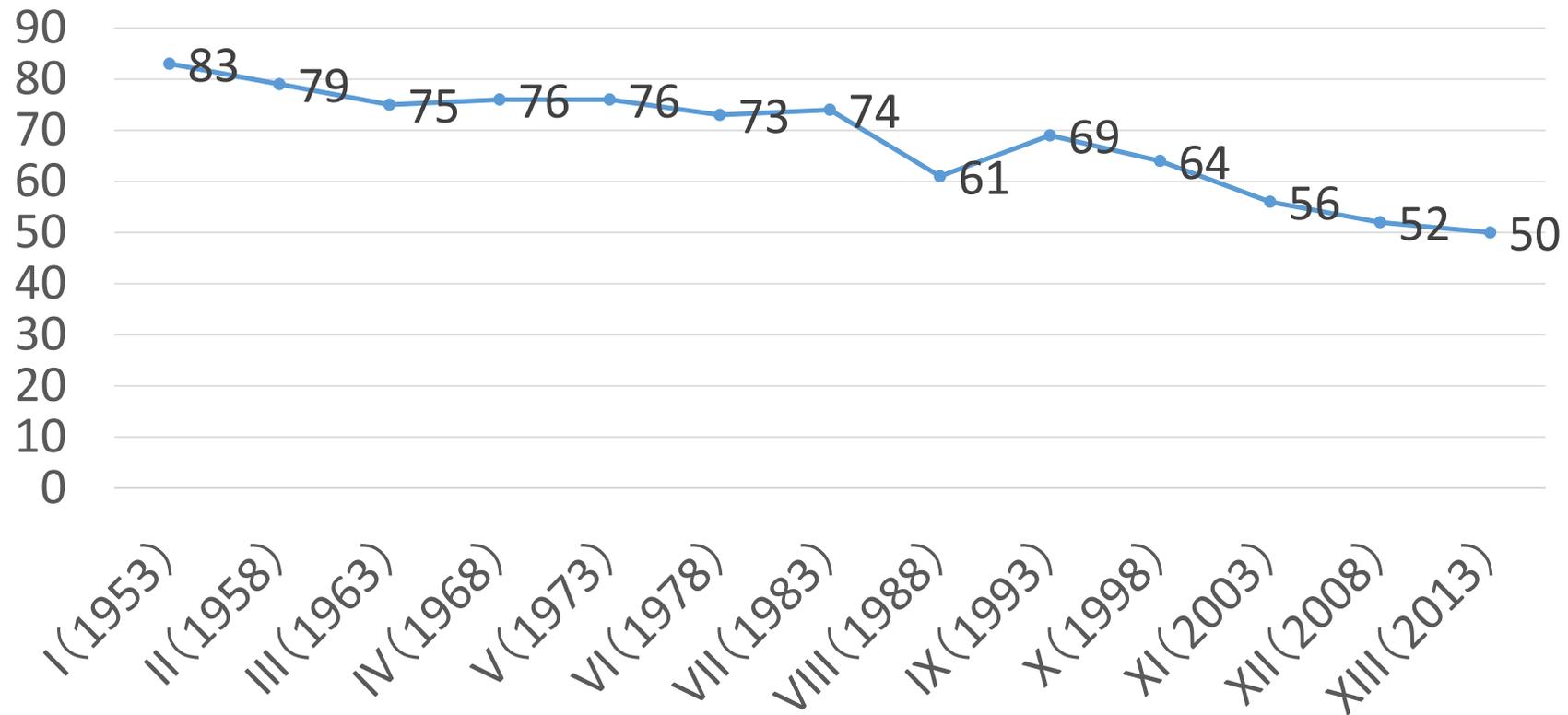
(階層リスト) 問 27、28、29、30

75年以降型 提示カード

1	上
2	中の上
3	中の下
4	下の上
5	下の下

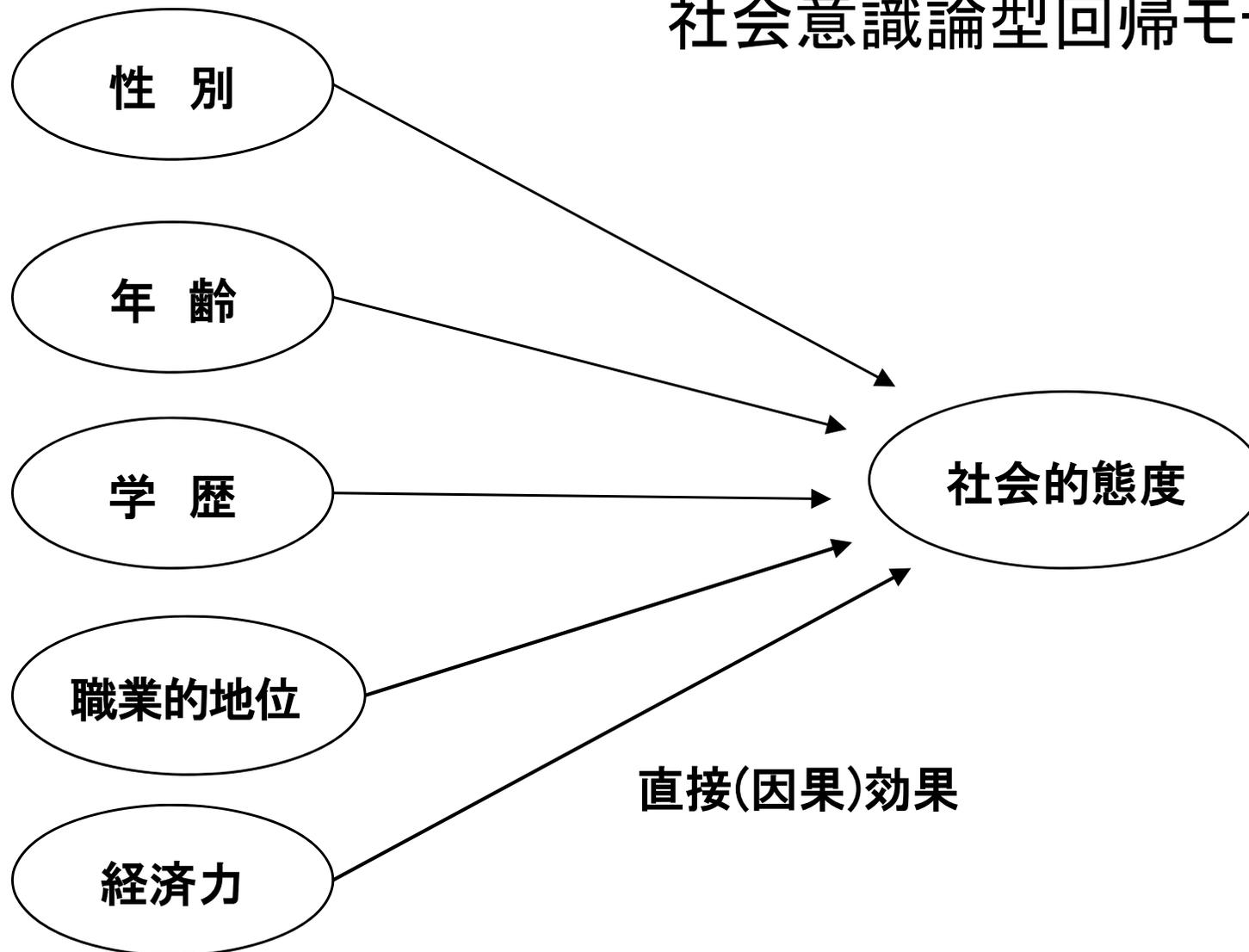
回収率の低下 83%→50% もはや「同様に継続」とはいえない?

日本人の国民性調査の回収率 (%)



①上下の軸をめぐる時代変化

社会意識論型回帰モデル



1985年
(SSM1985A+Fデータ)

5段階階層帰属意識

	相関係数		回帰係数		標準偏回帰係数	
	<i>r</i>	sig.	<i>B</i>	標準誤差	β	sig.
性別(男性<女性)	0.057**		0.156	0.04	0.088**	
年齢	-0.013		0.000	0.002	-0.002	
学歴(教育年数)	0.127**		0.021	0.008	0.065**	
世帯年収(対数値)	0.236**		0.279	0.027	0.210**	
下層ホワイト	0.027		-0.089	0.056	-0.039	
自営	-0.006		-0.062	0.061	-0.024	
熟練ブルー	-0.047*		-0.110	0.06	-0.045	
非熟練ブルー	-0.085**		-0.187	0.058	-0.083**	
農業	-0.004		-0.021	0.08	-0.006	
無職	-0.003		-0.106	0.066	-0.044	
決定係数(R^2)	0.071	**	修正済 R^2	0.068	**	

n=2590

職業カテゴリは上層ホワイトを基準とした値

2010年
(SSP-I2010データ)

5段階階層帰属意識

	相関係数		回帰係数		標準偏回帰係数	
	<i>r</i>	sig.	<i>B</i>	標準誤差	β	sig.
性別(男性<女性)	0.057		0.161	0.041	0.101**	
年齢	0.022		0.005	0.002	0.064**	
学歴(教育年数)	0.279**		0.069	0.011	0.175**	
世帯年収(対数值)	0.302**		0.198	0.023	0.218**	
下層ホワイト	0.032		-0.218	0.061	-0.107**	
自営	-0.060*		-0.342	0.074	-0.126**	
熟練ブルー	-0.052*		-0.235	0.072	-0.094**	
非熟練ブルー	-0.191**		-0.449	0.067	-0.204**	
農業	-0.068**		-0.644	0.161	-0.098**	
無職	-0.012		-0.209	0.064	-0.104**	
決定係数(R^2)	0.178	**	修正済 R^2	0.173	**	

n=1482

職業カテゴリは上層ホワイトを基準とした値

1985年の総中流社会状況



2010年の総格差社会状況

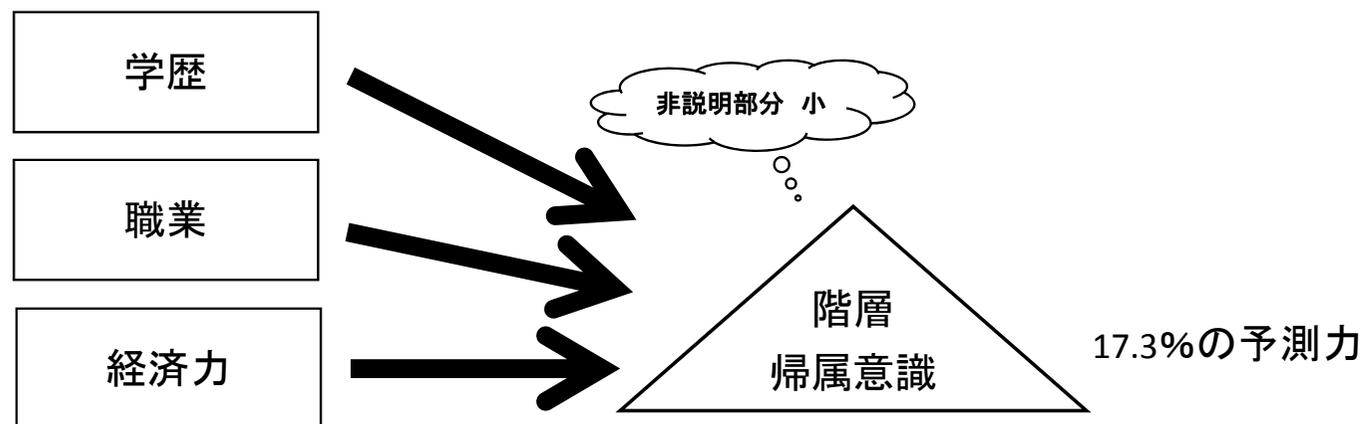
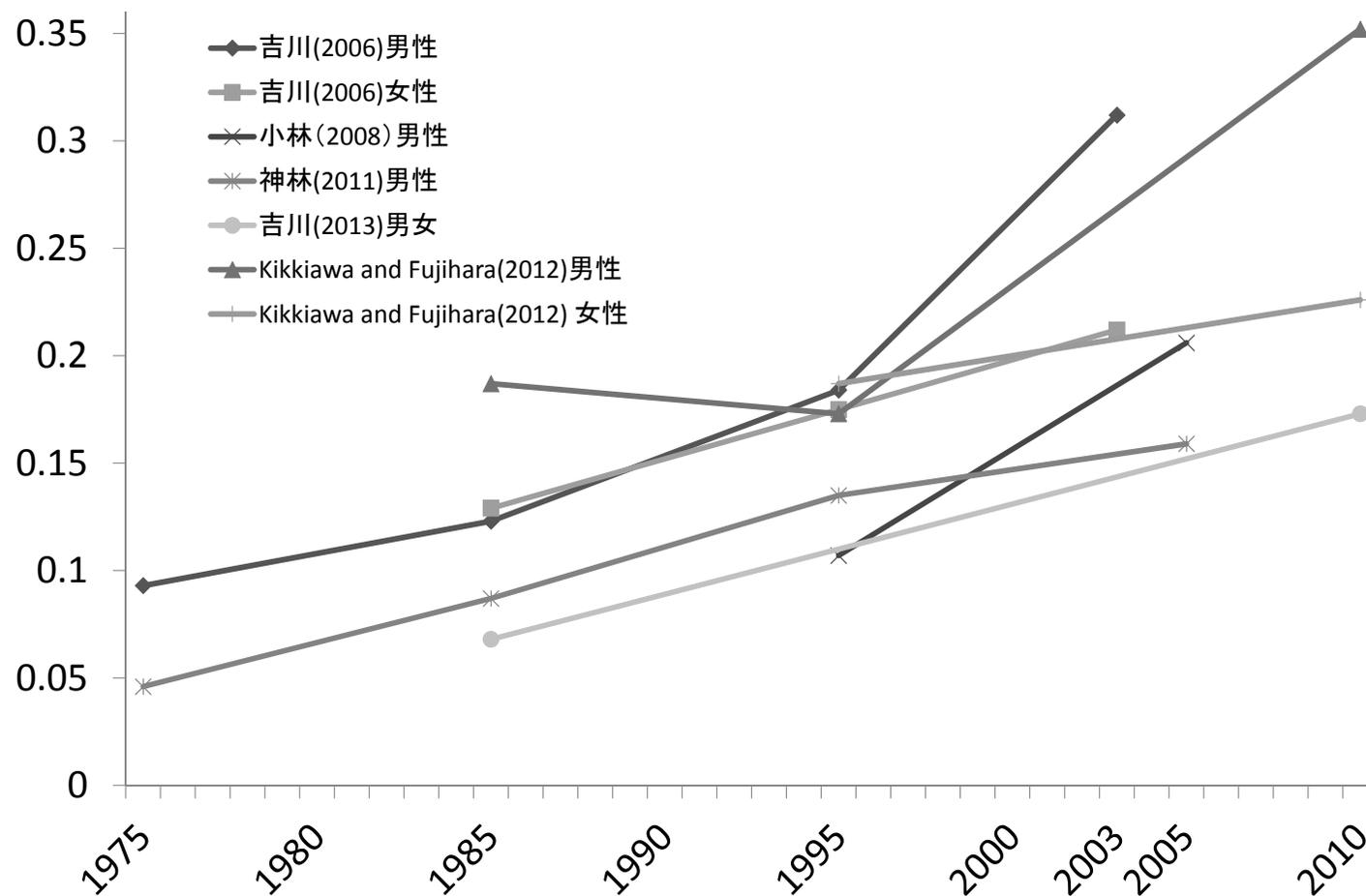


図5-1 25年間の変化の概略

階層帰属意識の静かな変容 (決定係数の増大)



5. 総中流社会から総格差社会へ

- 1985年 総中流社会
 - 決定係数が低く、経済階層主軸、シンプルな関係
 - 誤差が大きい→地位自覚メカニズムの歪みや誤り
 - だれがなぜ「中」と答えているのかよくわからない
- 2010年 総格差社会
 - 決定係数は約2.5倍、要因が多元化
 - 誤差の減少→地位の上下へのリテラシー／アウェアネスの高まり
 - だれもが格差に目を配って実情を知っている

①新旧の軸をめぐる時代変化

1995年男女

権威主義的伝統主義

	相関係数		回帰係数		標準偏回帰係数	
	<i>r</i>	sig.	<i>B</i>	標準誤差	β	sig.
性別	-0.007		-0.048	0.056	-0.024	
年齢	0.124**		0.009	0.003	0.082**	
学歴(教育年数)	-0.216**		-0.067	0.013	-0.151**	
世帯年収(対数値)	-0.115**		-0.130	0.045	-0.077**	
専門職	-0.078**		-0.035	0.153	-0.011	
管理職	-0.063*		-0.219	0.182	-0.043	
事務職	-0.079**		-0.074	0.139	-0.031	
販売職	0.036		0.111	0.147	0.036	
熟練ブルー	0.085**		0.094	0.143	0.034	
半熟練ブルー	0.047		0.043	0.148	0.013	
非熟練ブルー	0.058*		0.196	0.177	0.039*	
無職	-0.006		0.002	0.142	0.001	
決定係数(R^2)	0.065	**	修正済 R^2	0.058	**	

n=1523

職業カテゴリは農業を基準とした値

2010年男女

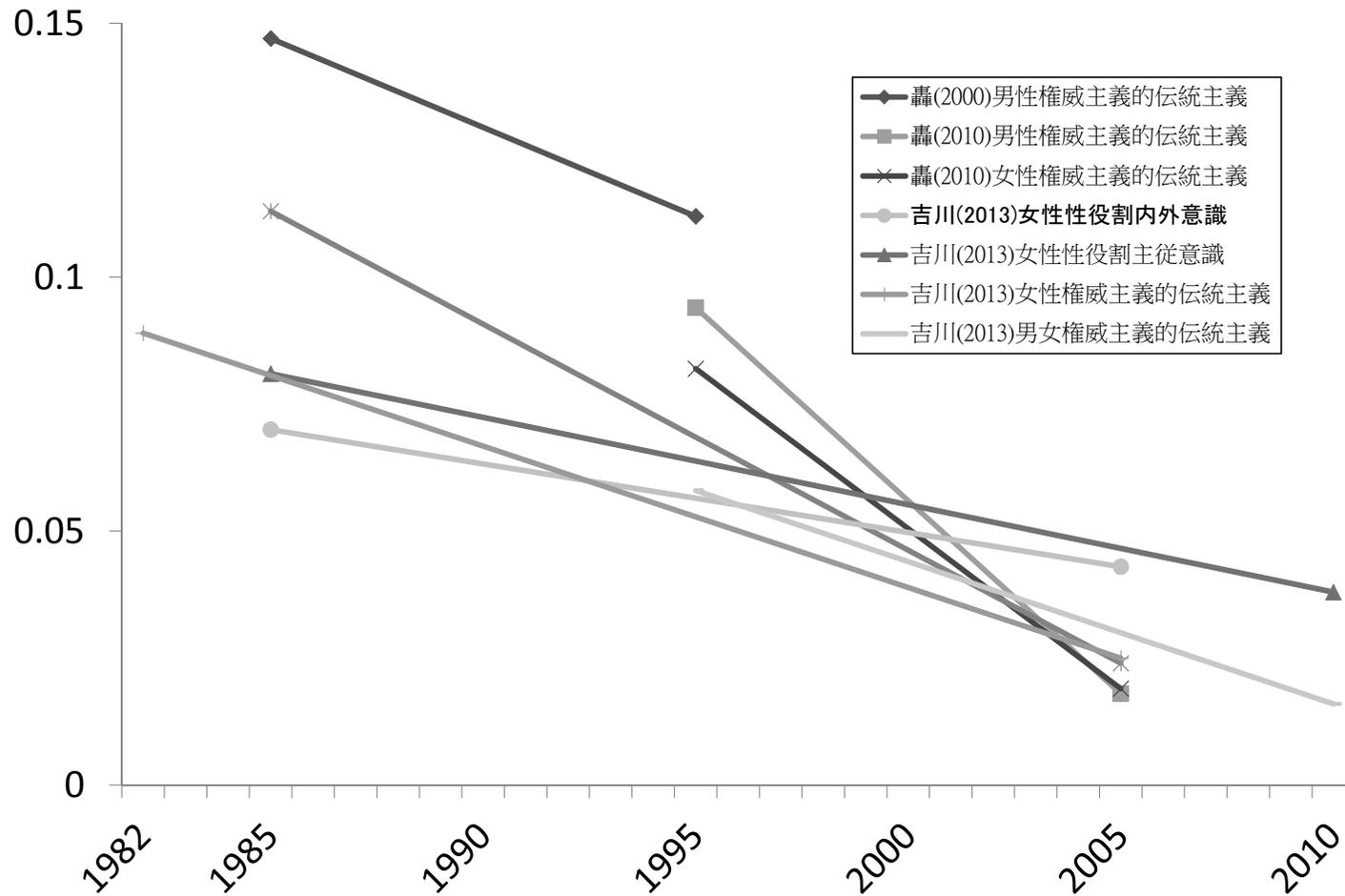
権威主義的伝統主義

	相関係数		回帰係数		標準偏回帰係数	
	<i>r</i>	sig.	<i>B</i>	標準誤差	β	sig.
性別	0.002		-0.059	0.064	-0.030	
年齢	-0.055		-0.007	0.003	-0.071*	
学歴(教育年数)	-0.116**		-0.061	0.015	-0.125**	
世帯年収(対数値)	-0.042		-0.014	0.043	-0.009	
専門職	-0.004		0.076	0.124	0.025	
管理職	-0.069*		-0.151	0.154	-0.035	
事務職	-0.012		0.037	0.111	0.015	
販売職	-0.012		-0.007	0.132	-0.002	
熟練ブルー	0.011		-0.001	0.127	0.000	
半熟練ブルー	0.044		0.12	0.147	0.029	
非熟練ブルー	0.056		0.297	0.167	0.059*	
無職	0.010		0.063	0.115	0.026	
決定係数(R^2)	0.026	**	修正済 R^2	0.016	**	

n=1227

職業カテゴリは農業を基準とした値

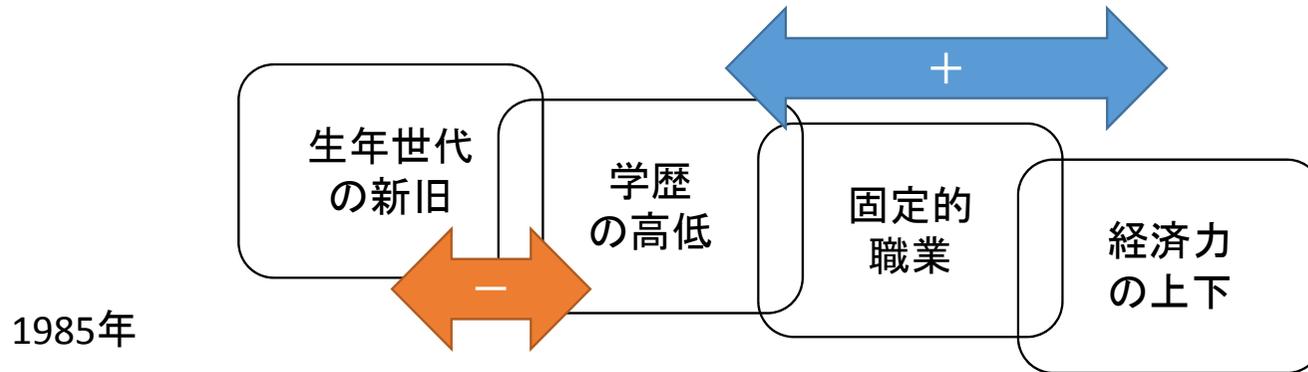
伝統—近代主義の静かな退役（決定係数の減少）



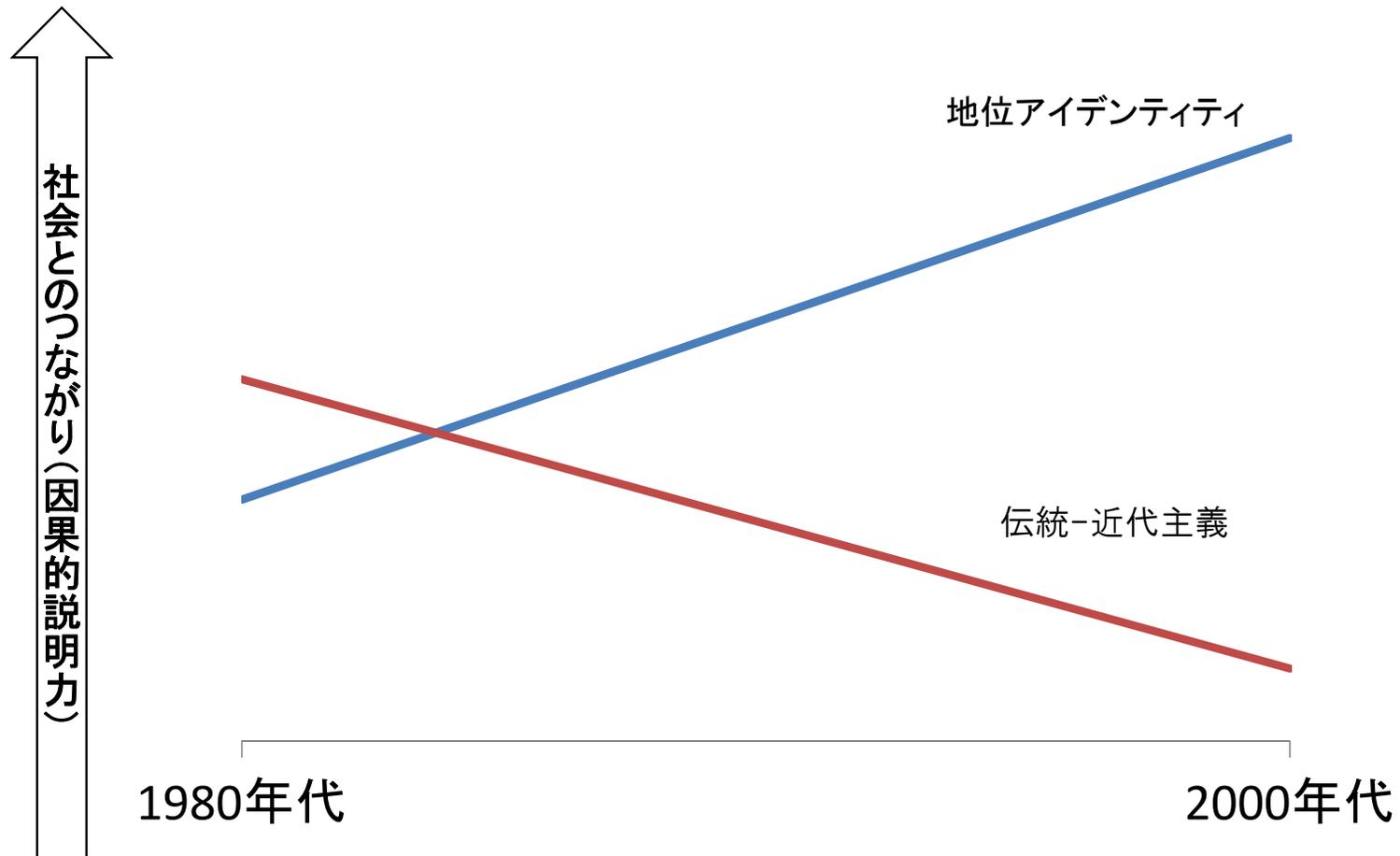
伝統－近代主義の静かな退役

- 「社会の心」の「傾斜」が緩やかに
 - 因果的説明力の低下傾向
 - 1980年代 世代差と学歴差が階層性を発生させていた
 - 2010年代 世代差の弱まり、高学歴化の終焉
 - 「傾斜」が不明瞭になり「補助線」として機能しなくなった

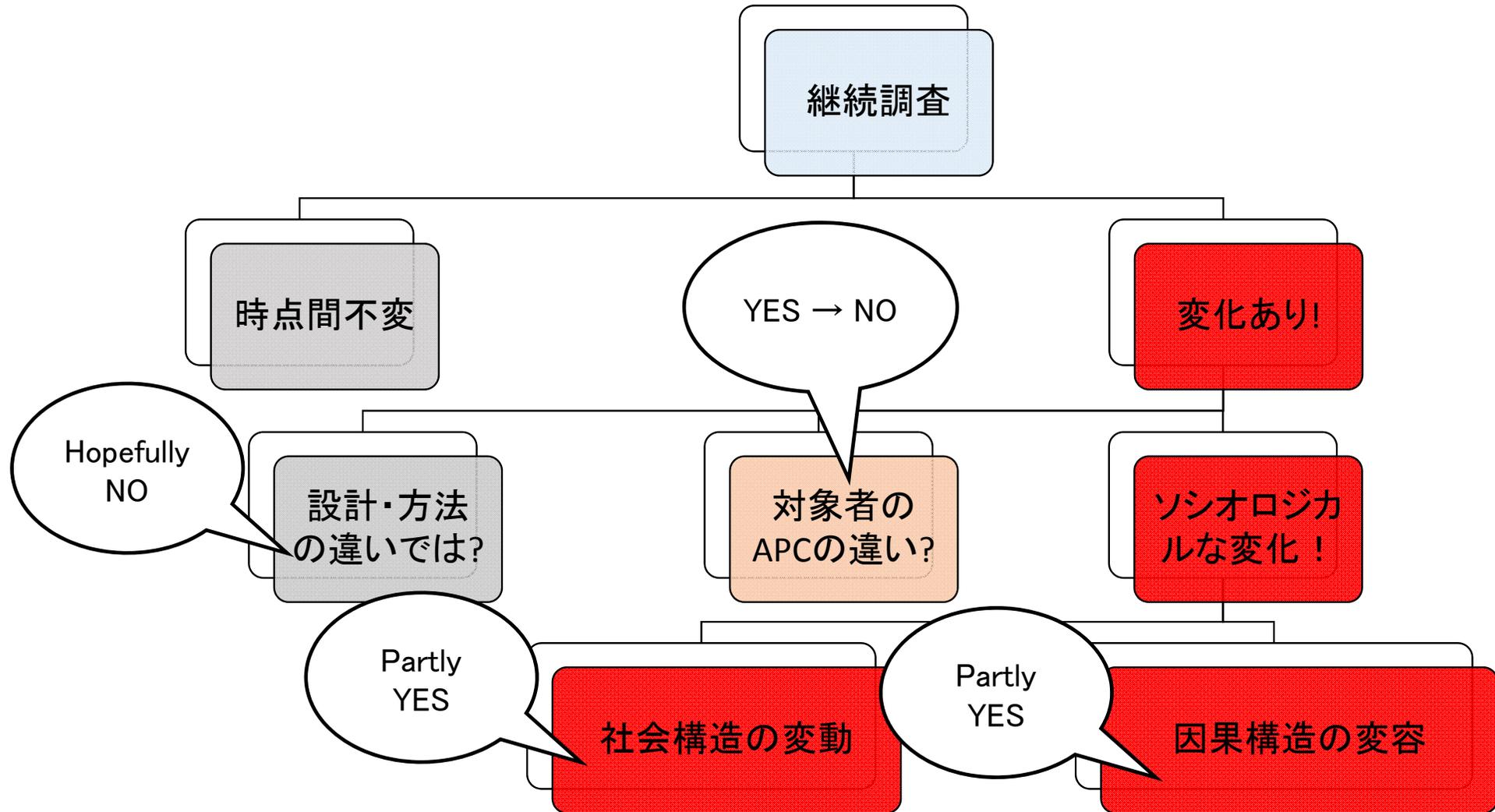
時代性と階層性のほつれ



相反する時代変化



変わる？ 変わらない？ まとめ



暫定的な帰結

- 社会調査の技法は転換期にある
- 意識自体はあまり変質していない (回答分布の膠着)
- 地位のリテラシーは高まり (因果構造の変容による)
- 20世紀の考え方の筋道は「退役」 (社会構造の変動による)
- 時代のベクトルは弱まったのでも、方向転換したのでもなく、多元化したのではないか